

老舗の風景

第二十四回

佐伯海産

忠文堂

内藤陶器店

東屋旅館



佐伯海産が開設した直売所「さいき海の市場〇（まる）」。多くの地元業者が商品を出し合い、特産の魚の干物や鮮魚、野菜などが所狭しと並ぶ。「先々代、先代が取引業者といい付き合いをしてくれたおかげ」と三代目の西田善彦社長（佐伯市葛港で）

■佐伯海産 佐伯市葛港

新たな挑戦、常に

「同じ事業がいつまでも続くことは絶対じゃないし、古いところほど新しいものを取り入れて生き続けている。それが老舗というものじゃないですか」

百年以上続く海産物卸問屋は、今まさに新たに動き出している。昨年十月、佐伯港に臨む直売所「さいき海の市場〇（まる）」をオープンしたばかりだ。海産物をはじめとする特産品がずらりと並び、観光客や地元客から好評を得ている。

明るい店内。地元の約八十業者が、自慢の商品を競うように置いている。「三代にわたる取引先がいつぱいある。わたしだけの力ではなく、じいさんやおやじ



一俵袋のイリコを荷台いっぱい積み込む佐伯海産のオート三輪やトラック。昭和20年代の写真という

がいい付き合いをしてくれたおかげ」と三代目社長の西田善彦さん（51）。

創業は一九〇二（明治三十五）年。佐伯湾や近隣の港から集めたイリコ、チリメン、丸干し魚を、九州はもちろん瀬戸内や京阪神方面に運んでいる。「海」の字を丸で囲んだ「まるかい」の通称で親しまれ、「関西で、佐伯の『まるかい』を知らない海産物屋はいなかった」という。

かつては旅客船業や製氷業を手掛けたことも。現在は海産物のほか、養殖用餌料の卸売りや冷蔵倉庫業も営んでいる。

「時代に適応していくためには、時代を見通して先取りしないと駄目」と西田社長。近年は魚の水揚げが減ってきていることもあり、「もう大きな船で魚を運んで売る時代ではなくなつた」と考えている。

直売所の新設は、流通システムの変化や高速道路の開通をにらんだものだ。

「旧態依然では企業は続かない。全部が当たるわけじゃないけど、一生懸命に考えて次の手、次の手を打っていかないと」と奮闘する経営者。

新たな息吹を得ることで、老舗はまた走り続ける。

佐伯支社・小林大輔（二〇〇七年三月七日掲載）



忠文堂など5店が集まって建てた「たからやストア」=昭和27（1952）年ごろ

■忠文堂／大分市中央町

一針一針心込め

社長の古後俊彦さん（83）の祖父六郎さんが、一八九三（明治二十六年）年、大分市竹町に本屋「忠文堂」を開いた。六郎さんの早世後、妻のユミさんが営んでいた仕立屋だけが残った。

人々の服装が和装から洋装に切り替わった時代。洋服の仕立てがやはり、大正末から昭和初めにかけては、十人以上の縫製工が住み込みで働いていたという。学生服や官公庁の制服は、創業時から扱っていた。

二代目の円次さんの時、戦災で竹町の店が焼失。一九五二年、中央町に毛糸店、小間物店、ドレス店、木工所と共同で、木造二階の複合商業施設「たからやストア」を建てた。

四代目として店を切り盛りする常務の年魚子（あゆこ）さん



「お客さまの笑顔を見るのが一番の喜び」と、学生服を見立てる古後年魚子常務

(44) は「今でも『たからやさん』と呼ぶ人がいますよ。昔は家の中に人がたくさんいてにぎやかでした」と振り返る。

高度経済成長やベビーブームに乗って受注が増え、六七年には市内庄の原に縫製工場を移設。四十人も縫製工が働いていた時期もある。現在は二十歳から六十七歳まで、十二人の職人がいる。工場内には「一針一針心を込めて」と書かれた古い張り紙がある。職人たちは、自分が縫った服を着る人に会うことはないが、着た姿を想像しながら丁寧に仕立てていく。

中央町の店舗は三月、中学や高校への進学を控えた子どもたちでにぎわっている。二月から五月末までが学生服受注の最盛期。親子三代で忠文堂の学生服を着るといふ家族も少なくない。

「真新しい制服に袖を通すお客さんの笑顔を見ると、こちらまでやる気になる」と年魚子さん。「学生服は学生時代にしか着られないもの。愛着を持って大切に着てほしい」と願っている。

社会部・小野良子（二〇〇七年三月十四日掲載）

■内藤陶器店／竹田市竹田町

城下町を見守る

古い商家が並ぶ市内中心部の中でも、ひとときわ長い歴史を持つ。店主は内藤昭治さん（71）。

祖父の五郎さんが陶器店を開業したのは一九〇六年だが、先祖をさかのぼれば約三百年、城下町とともに歩む商家としての営みが続いている。

銀行員だった父

仙平さんは終戦を前にした一九四四年に戦死。戦中戦後は祖母と母が店を守ってきた。小学生だった昭治さんも母と一緒に汽車で大分市まで金物などを買い付けに行った。

「長男で体も大きかった。リュックサックいっぱい荷物詰め帰ってきた。戦後



商品の手入れをする内藤さん夫婦



古い商家が並ぶ市内中心部の中でも、ひととき長い歴史を持つ内藤陶器店

は金物がなく、飛ぶように売れた」という。

最盛期は六〇年代。お祝い事などがあると、茶わんや皿などが数十個単位で売れた。ギフトシーズンは「食事を取る時間もなかった」と妻のヤエ子さん（65）と振り返る。

昭治さんは「戦後は周囲の人たちに支えられた。お返しをし

たい」と思っていた。その一つとして、店の向かいにある空き店舗を購入。「厚生倉」と名付け、資料館をオープンさせた。

内藤家のルーツは安芸（広島県）福島家の家臣。福島家が改易となったことに伴い、一六一六年ごろ、竹田市に移り、三代目が「金屋」を屋号に商人の道を歩み始めた。その後、岡藩との密接な関係を築いて発展。藩の備蓄米を管理したが、その倉庫の名前が「厚生倉」だった。

空き店舗解消に一役買うとともに、ひな祭り時季には人形を飾り、観光客が足を止めるスポットとなっている。それでも以前に比べると、人通りの減った商店街。「歴史ある町が沈滞している。何とかしなければ。沈んでいてはいけない」。頭の中は町への思いでいっぱいだ。

竹田支局・赤坂耕（二〇〇七年三月二十一日掲載）

■東屋旅館／由布市湯布院町湯平温泉

触れ合い大切に

古い石畳に沿って旅館や商店が軒を連ね、浴衣姿の観光客が浴場に向かう。湯平温泉には、古き良き湯治場の風情が今も残っている。

歴史ある温泉街の中でも指折りの老舗。創業年は不明だが、一八八六（明治十九）年発行の旅館業許可証を示す木札が現存しており、主人の麻生耕治さん（65）も「明治初期には温泉宿を始めていたようです」と話す。



湯平温泉は胃腸病に効く名湯として昭和初期に最盛期を迎え、活況は昭和三十年代まで続いた。療養に訪れる湯治客の多くは一週間から十日、長い場合は一カ月以上も連泊し、体を癒やした。長期の滞在で自然と互いの交流も深まり、「一カ月もたてば家族同然に仲良くなった」という。「廊下の手すりには泊まりのお客さんが干した手ぬぐいが所狭しと並んで、ひらひらと風にたなびいていました」。麻生さんは、活気に満ちた当時の様子をこう語る。

だが―。時代の移り変わりとともに、湯治目的の長期宿泊は減り、「二泊三日」が主流に。宿泊客との人間的な触れ合いも少なくなった。

そうした中、麻生さんは旅館改築に合わせて、談話室

昭和初期ごろの東屋旅館。湯平温泉の名湯を求めて、多くの湯治客が連泊し、廊下の手すりには手ぬぐいが並んでいたという

にいろいろを設けた。「お客さんが客室にこもらず、和気あいあいと会話を楽しめるように」との心遣い。炭火を囲み、和やかに過ごせる雰囲気は宿泊客にも好評だ。「宿泊客のニーズは多様化しているが、そうした人と人との触れ合いは昔も今も変わらないんです」

温泉街では現在、湯平に活気を

取り戻そうと、温泉資源や趣ある街並みを活用した地域おこしが進んでいるが、麻生さんは「大事なことは、湯平が湯平であり続けること」と言う。「自然の恩恵である温泉に感謝し、石畳などの景観を守り、湯平温泉を後世につなげたい」。老舗の誇りと地域への愛着を礎に、東屋旅館はこれからも歴史を重ねていく。

由布支局・百崎浩嗣（二〇〇七年三月二十八日掲載）

N



いろいろは談話室と、江戸時代の米蔵を改装した「離れ」にも設けている

■オオイタデジタルブックとは

オオイタデジタルブックは、大分合同新聞社と学校法人別府大学が、大分の文化振興の一助となることを願って立ち上げたインターネット活用プロジェクト「NAN-NAN (なんなん)」の一環です。

NAN-NAN では、大分の文化と歴史を伝承していくうえで重要な、さまざまな文書や資料をデジタル化して公開します。そして、読者からの指摘・

追加情報を受けながら逐次、改訂して充実発展を図っていきたいと願っています。情報があれば、ぜひ NAN-NAN 事務局にお寄せください。

NAN-NAN では、この「田舎暮らし」以外にもデジタルブック等をホームページで公開しています。インターネットに接続のうえ下のボタンをクリックすると、ホームページが立ち上がります。まずは、クリック!!!

大分合同新聞社



別府大学

デジタル版「老舗の風景」 第二十四回

編集 大分合同新聞社
初出掲載媒体 大分合同新聞 (2005年4月6日～2007年3月28日)

《デジタル版》
2010年5月7日初版発行

編集 大分合同新聞社
制作 別府大学メディア教育・研究センター 地域連携部/川村研究室
発行 NAN-NAN 事務局
(〒870-8605 大分市府内町3-9-15 大分合同新聞社 企画調査部内)

© 大分合同新聞社

●デジタル版「老舗の風景」について

「老舗の風景」は、大分合同新聞社が2005年4月から翌2007年3月まで、同紙夕刊に掲載した連載記事。今回、デジタルブックとして再構成し、公開する。登場人物の年齢をはじめ文中の記述内容は、新聞連載時のもの。

2009年11月20日

NAN-NAN 事務局